

うかうかと書いているうちに、「一以つて之を貫く」という言葉
を先月号で書いてしまい、浅くとればあれでもよいのですが、論語
に出て来るあの言葉は、孔子さまの全哲学を要約した「一」で、孔
子の道は「仁」だといえ、仁をもつていかなる行動も行い、これ
から外れることはなかつたとおっしゃるのだし、その高弟の曾子の
いう、孔子先生の道は「忠恕」だとすれば、この忠恕こそは仁と同
じく「一」に相当するのである。

だから、平安期末期の日本仏教界に一新生面を開かれた法然上人は、
何ごとをするのにも仏を拝みつつ仕事をしなす。仕事をしながら念仏
するのではいけない——とおっしゃっているのと同じで、生活の根
本の中にひとつの信念が確固として存在し、しぜんに行動の一切が
そのひとつの信念から出発しているのが、わが宗門の風だと誇えて
おられる。ここでは念仏が「一」に当たるのである。

少しくどいようですけれど、儒教の一派の中に「陽明学派」とい
うのがあり、以上のようなことを一歩進めて簡明に説き「知行合一」
といっている。知っていることは行われていなければ知っていると
ちに入らない。栄養価値があるといつても、体内で消化して実際に
益のあるところが見えなければ、栄養を体得していないのだと喝破
している。ここでは知行合一が「一」である。行っていないのはま
だ知らないのだという、実に迫力のある立派な言葉である。

まあそんなわけで、明治小説で有名な「金色夜叉」の中で唄われ
ている、貫一お宮の二人連れ——という貫一さんでも、「古今和歌集」
の選者である紀貫之でもみなこの思想によつた名であつたのではな
かるうか。

そこで前号のひとつの道というのは、ただ一貫してやつてきたく
らいの浅い意味ではなく、俳句を作つても詩を作つても、文字学を
やつても、歴史を学んでも、帰するところは書道に益するところか
あるようにと期していることである。

日本でも中国でもよく人柄、あるいは書の性格を評した言葉に、「胸
に巻軸（書籍のこと）に富む」とか「書巻の気がある」とかいつて
いるけれど、これは何かと学んでいれば、いつしかその書の中にひ
とつの風格が備つて、端然たるもの、あるいは洒然たるものが匂い
出ていることである。

有名な禅僧の書など引くまでもなく、私なども存じ上げていた著
名な学者の書などを見ると、たとえば京都大学文学部の故内藤湖南
先生、東大医学部の故橋田邦彦先生の書かれたものなどを見ると、
思わず脚をとめさせられるくらいのものである。何という気品で
あろう。鎌倉期から日本へ入つた禅僧のもののように千差万別、実
にさまざまな風韻、姿態を持ちながら硬軟おのずから備わるもの
をうたえたい。

今日市井に見かける重い墨で荒々しく書いたものだけが、禅風茶
掛けなどというのと段が違ふ。この一幅にみざる馥郁たるものこ
そは、鍛練の人格、書巻の気以外の何ものでもないのではなからうか。
まあこんな理屈を述べるつもりはなかつた。「一」がただひとつ
の道という意味にとられたら大変だと思つて、つい言葉が多くな
りました。

ところでこんどは少し角度をかえて、書をかいた苦勞話でもご参
考になりそうなものを選んで二、三回お話を續けてまいりましょう。

今までによく訊かれるのは、大きい碑をいくつくらい書いたか、
一番大きい字はどのくらいかなどと問われるが、戦前は青函（青森・
函館間のこと）連絡船や関釜（下ノ関・釜山間のこと）連絡船の船
名を新造のたびに書かされ、これはそばに寄つて見ると実に大きい
もので、しかも必ず楷書で太くなければならぬ、というもの。
通称日本の船を「丸シツプ」と外国で呼ぶそうだが、全くその通
り軍用艦以外はみな「〇〇丸」である。上の二字がどんな複雑な文
字でも三字めは「まる」でまとめなければならぬ。（つづく）

〔書範〕、昭和五十六年九月